

# 明暗評釈・一

## 第一回(上)

〔初出〕 大正五年(一九一六年)五月二十六日・「東京朝日新聞」

大正五年五月二十六日・「大阪朝日新聞」。

### 〔注釈〕

①【津田】 津田由雄。年齢三十歳。勤め人・サラリーマン。

(一)、第二十五回に、△お金さん由雄よおさんによく頼んでお置きなさいよ。▽とある。

(二)、第十回に、△じゃ申し上げます。実は三十です▽とある。

(三)、第九回に、△翌日津田は例の如く自分の勤め先へ出た。……又自分の机の前に立ち戻った。そうして其所で定刻まで例の如く事務を執った。時間になった時、彼は外の人よりも一足後れて大きな建物を出た。▽とある。

小林信彦の、△小説世界のロビンソン④④ 第四十三章 新聞小説の効用 I V (『波』、新潮社、昭和六十二年(一九八七年)十月号)に、次の

指摘がある。

△「明暗」の第一回を見てみると、主人公である〈津田〉の名前が、うるさいほど、眼につく。第二回は、さすがに、〈彼〉だけであるが——これは他の人物が出てこず、津田の心象風景のみだから——、第三回では、ふたたび、〈津田〉の名が連呼される、というわけで、読者が、津田やお延や吉川夫人や清子の名前を諳まもんじてしまうのは、自然なのである。▽ (P. 33)

②【今日】 大正三年・四年、或いは大正五年の、晩秋の或る水曜日。

(一)、第三十九回に、△だって貴方今日は日曜日よ▽とある。この第三十九回・日曜日は、小説の第五日目である。ここから逆算して、小説の第一日目は、水曜日である。

(二)、①第十三回に、△彼は身に薄い外套を着けていた。季節からいうと寧ろ早過ぎる瓦斯ガス煖炉の温かい鉄はつをもう見て来た。▽とある。②第

鳥井正晴

三十三回に、△「日中は暖かだが、夜になると矢張り寒いね」「うん。何と云ってももう秋だからな。実際外套が欲しい位だ」▽とある。

(三)、第五十二回に、△戦争前後に独逸を引き上げて来た人だという事だけがお延に解った。▽とある。

第一次世界大戦は、大正三年七月二十八日に始まり、大正七年十一月のドイツの降伏をもって終結する。大正三年八月二十三日、日本はドイツに、宣戦布告をする。

従って、作品の時間は、第一次世界大戦の勃発前後、即ち大正三・四年、或いは、『明暗』執筆時の大正五年と考えられる。

大正五年・秋は、第一回掲載時の、大正五年五月二十六日現在においては、現出しない未来の時間である。しかし、『明暗』という小説の△その過度の現代性ゆえ▽（坂口曜子『蹟あときとしての文学 漱石「明暗」論』、河出書房新社、平成一年（一九八九年）四月）を考えれば、執筆時の大正五年・秋、或いは敷衍すれば、各読者の享受時を、そのまま『明暗』の時間と考えても差し支えない。

③【医者を探りを入れた後で】 小林医院。

(一)、①第三回に、△今日帰りに小林さんへ寄って診て貰って来たよ▽とある。

②第二十九回に、△小林は追い掛けて、その病院のある所だの、医者の名だのを、さも自分に必要な知識らしく訊いた。医者の名が自分と同じ小林なので▽とある。

③第四回に、△「だって小林さんは病院じゃないって何時か仰っ

たじゃないの。みんな外来の患者ばかりだった」「病院という程の病院じゃないが、診察所の二階が空いてるもんだから、其所へ入る事も出来るようになってるんだ」▽とある。

津田の病氣「痔」は、漱石自身の体験が下敷きになっている。漱石は、痔（痔瘻）の治療のため、明治四十四年九月から、神田区錦町（現・千代田区神田）の佐藤診療所に通い始める。大正元年九月二十六日には、再び切開手術を受け、十月二日まで佐藤診療所に入院する。

④【「矢張穴が腸まで続いているんです。この前探った時は、途中で癩痕の隆起があったので、つい其所が行き留りだとはかり思って、ああ云ったんですが、今日疎通を好くする為に、其奴をがりがり掻き落して見ると、まだ奥があるんです」

「そうしてそれが腸まで続いているんですか」

「そうです。五分位だと思っていたのが約一寸程あるんです」

(一)、明治四十四年十一月二十日の、漱石の日記に、次の如くある。△佐藤さんの所で又肛門の切開部の出口をひろげる。がりがり掻き音がした。今度は思ふ存分行ったといふ。看護婦も是で本当に済みましたといふ。然し深さは五分程まだある。此先癒るとしてもまだ二三度はこんな思ひをしなければならぬかも知れない。余程たちの悪い痔と見える。▽

(二)、明治四十四年十二月四日の、漱石の日記に、次の如くある。

△比朝佐藤さんへ行つて又痔の中を開けて疎通をよくしたら五分の深さと思つたものがまだ一寸程ある。途中に癩痕が瘤起してゐたのを底

と間違へてゐたのださうで、其癢痕を掻き落してしまつたら一寸許りになるのださうである。しかも穴の方向が腸の方へ近寄つてゐるのだから腸へつゞいてゐるかも知れないのが甚だ心配である。凡て此穴の肛門に寄つた側はひつかゝれたあとが痛い。反対の方は何ともない。▽

⑤【まだ奥があるんです】

(一)、第三百三十四回に、△然しこれは寧ろ一般的の内情に過ぎなかつた。もう一皮剥いて奥へ入ると、底にはまだ底があつた。津田と吉川夫人とは、事件が此所へ来るまでに、他人の関知しない因果でもう結び付けられていた。▽とある。

(二)、第四百四十二回に、△もう一步夫人の胸中に立ち入って、その真底を探ると、飛んでもない結論になるかも知れなかつた。彼女はただお延を好かないために、ある手段を拵えて、相手を苛めに掛るのかも分らなかつた。▽とある。

(三)、第九十六回に、△その癖口では双方とも底の底まで突き込んで行く勇氣がなかつた。▽とある。

(四)、次は、人間の「精神」についてではなく、建物の「構造」についてであるが、①第七十三回に、△まだ下にもお風呂場が御座いますから、もし其方の方がお気に入るようでしたら、どうぞ」来る時も階子段を一つか二つ下りている津田には、この浴槽の階下<sup>した</sup>がまだあろうとは思えなかつた。「一体何階なのかね、この家は」下女は笑つて答えなかつた。▽とある。

②第七十九回に、△彼は、全身を温泉に浸けながら、如何に浴槽の位置が、大地の平面以下に切り下げられているかを発見した。そうしてこの崖<sup>が</sup>と自分のいる場所との間には、高さから云つて随分の相違があると思つた。彼は目分量でその距離を一間半乃至二間と鑑定した後で、もしこの下にも古い風呂場があるとすれば、段々が一つ家の中に幾層もある筈だといふ事に気が付いた。▽とある。

この、△まだ奥があるんです▽、△奥へ入ると、底にはまだ底があつた▽、△その真底を探ると▽、△底の底まで▽、△まだ下にも▽、△階下<sup>した</sup>がまだあろうとは▽——は、『明暗』という小説のモチーフが、よく象徴されている。人間の「心」のこと、「精神」のことは、実は、奥には奥があり、底にはまだ底があり、幾層にも重層をなしている。——その人間の「心」の、どこまでも解決のつかない内奥に、『明暗』の作者は、測鉛を降ろしていく。

「まだ奥があるんです。そうしてそれが腸まで続いている」という、津田の「痔」という病氣の設定は、『明暗』という極度に「心理小説」において、うつつけであつた。

⑥【御氣の毒ですが事実だから仕方ありません。】「事実」という語は、『明暗』においては、頻出度も多く、重要な意味を担わされている場合が多い。

相原和邦の、△到達期の核——「実質の論理」と「相對把握」▽（『漱石文学の研究』表現を軸として）、明治書院、昭和六十三年（一九八八年）二月）に、次の言及がある。

△漱石文学を表現に即して追求するとき、これまでの論及が集中しているのは、「天」および「自然」という語についての考察である。これらの用語の重要さはいうまでもないが、晩年の漱石文学には、これらと相並ぶ重量を持つものとして、「論理」「事実」「眞実」等に代表される一群の用語が頻出している。これは「実質の論理」の探求と密接な関わりを持つ。また、「天」や「自然」の語が超越的な世界を志向するのに対し、これらの用語はあくまでも「実在」に即し「実在」の奥底をきわめようとする点でいわば地上的な志向であり、「実在」追求を主眼とする近代小説にとってきわめて重要な鍵を秘めているものだといえよう。▽(P.363)

そして、相原和邦は、「事実」という語の用例数として、『こゝろ』における二十一回、『道草』における二十八回を挙げる。『明暗』における「事実」という語の用例数は、九十五回に上り、その内、四十二回は、△重要な用法をなす語▽ (p.390) として、使用されていると指摘している。

\*

『明暗』本文の引用は、新潮社刊、新潮文庫・『明暗』

(昭和六十七年六月二十五日 発行)  
平成元年九月十日 六刷) に拠った。